

萬葉集東歌私記（1）

— 日本文学と自然 —

桂 孝 二

私は本稿で東歌の面白さを見てゆこうと思う。東歌の大部分は後記するように恋愛をテーマとしているが、よく読むとその序詞中に東国人の生活が背景に現れていて目を見張る思いがする。そういう点を中心に本稿を書いてゆこうと思う。なお、参考文献書名は略称で書くこととするが、本文末に記すこととする。

東歌は遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵・上総・下総・常陸・信濃・上野・下野・陸奥の順に国名明らかな作を収めている。上記のうち、武蔵国は早い時代には東山道であったが、宝亀二年に東海道に編入されたので、これを証として山田孝雄氏は「万葉集の編集は、宝亀二年以後なるべきの証」^{註②}なる一文を書いていられるが、『注釈』^{註①}では「この集の最初の蒐集者は不明であるが、今日見る如き形に編輯したのはやはり家持でないかと私は考える。」と言われ、宝亀二年以後というのは「さうした整理を加へた時期として参考せられるべきである。」と言われている。『全註釈』^{註③}では、宝亀二年以後の編纂説を述べ、東歌の「作品個々の年代も大部分は不明で、大体これより前の諸巻の作品の年代より下ることはあるまいと考へられる。」と言われている。つまり、作品自体の年代は宝亀二年以前と考えていられるようだ。

東歌を収めた巻十四の内容は国名明らかな歌を最初に並べ、雑歌5首、相聞往来歌76首、譬喩歌9首、国名の分らぬ歌をつぎに雑歌17首、相聞往来歌112首、防人歌5首、譬喩歌5首、挽歌1首、合計230首を収めているが、譬喩歌、防人歌、挽歌はすべて恋愛に関するものであり、雑歌もほとんど恋愛情調の作で、そうした気分のない作は7首にすぎない。（その7首は、3348、3349、

3352, 3442, 3447, 3448, 3449である。)したがって、この東歌の巻は恋愛歌集と言っても良いようである。ただ、同巻中、あるいは他の巻にも類歌が多く、歌謡的なものが多く含まれていることが認められる。

つぎに東歌中には東言葉が相当数見え、そこに一種の面白味を私たちは感じるのであるが、その東言葉をはっきりと記すために一字一音の表記法が採られている。それ故に本稿では標記としてとりあげる歌は原文を記し、かな交りを添えることとする。

(1)

3355 安麻乃波良 不自能之婆夜麻 己能久礼能 等伎由都利奈婆 阿波受
可毛安良武

天の原富士の柴山木の暗(くれ)の時移(ゆつ)りなば逢はずかもあ
らむ

この第2句の柴山の柴については従来あまり注意されていない。折口信夫の『口訳』^{註①)}では「大空に聳えた富士の、麓の樅木山がこんもりと、木暮(コノクレ)深く茂っている。それではないが、この暮れ方の約束の時刻が移ってしまったら、もう逢へないかも知れない。」と解しているが『東歌疏』^{註②)}では、この「富士の柴山」について「柴山は柴を採集しに這入る山地。今で言へば富士の裾の樹林を斥すのであらう。」と柴について注意されている。古注では柴を刈る山という解はあまりなく、『代匠記精』^{註③)}に「之婆夜麻トハ柴刈(カル)山ヲ云ヒ、或ハ芝(シバ)ノミ生ル山ヲ云。」とあるぐらいである。

新しいものでは、この『代匠記精』や『東歌疏』の解を問題にせず、「いかにも天空に聳える富士を仰いだ気持が出てある。……柴山は木の繁った山の謂である。山麓の人の見る富士山が描かれてある」(『全註釈』)「富士の山麓の柴山を言った。」(『註釈』)と山麓の人々の柴を刈る山であったことを無視している。

柴と言えば、私どもはオジイサンハ山ヘシバ刈リニ、オバアサンハ川ヘセンタクニという幼い時の昔話の冒頭を思い出すのであるが、それが昔の人の生活であったのであろう。富士の柴山は山麓の住民の生活とかかわりのあるものだ

ったのである。

私としては東歌には、以下にも述べるように、その生活が土台となっている点に興味があり、かつ、その点を忘れてはならぬと思う。万葉集巻三の山部赤人の歌では「天地（あめつち）の分れし時ゆ 神さびて高く貴き 駿河なる布士（ふじ）の高嶺を 天の原振り放（さ）け見れば云云」（367）と高く貴く、はるかに仰ぎ見る神のごとき存在と見ているが、その山麓の住民にとっては柴を伐り取る山であるのみならず、「足柄の箱根の山に粟まきて云云」（東歌3364）とあるのと同じように、開墾して農作業を行なう生産の場でもあったのであろう。

さてシバについては、万葉集大成第8巻「万葉集の植物」（松田 修）にこう記している。「万葉にシバと言っているのは今云ふシバ一種をささず、茅草の如き路傍、荒地等に生ずる禾本科属の総称と考へる。また灌木類にもシバといふ。大原のこの市柴（513）富士の柴山（3355）阿須波の神に小柴さし（4350）は明らかにこれである。この両者の区別は、普通の路傍のシバには芝を当て、灌木のシバには柴を当てる。」

本歌の場合この「之婆」は灌木と一般に考えられている。そして、この歌の第3句「己能久礼」を「木の暗（くれ）」と考え、「木の下闇」の時期としているのが『全註釈』『私注』^{註(1)}『註釈』であるが、私は『代匠記』^{註(1)}に「この暮も此暮歟木闇（クレ）歟。長流が抄には木のくれと見て木の下くらきなりといへと、此夕くれといへるにやと聞ゆ。」とあるのや、『略解』^{註(1)}引くところの宣長の説、すなわち「宣長云、上二句はこのくれの序のみなり、木之暗を此暮に言ひかけたる也といへり。」という解に従いたいと思う。『東歌疏』『岩波版大系』^{註(1)}などがこの説を受けている。『註釈』では万葉集では「コノクレの語が12例あるが、いずれも『木の暗』の意であって、『この暮』と言ふべきところは『此のゆふべ』（386・1314）とのみある。」と述べ、「ゆふぐれ」の語はあるが、「この夕ぐれ」の例もないと述べ『拾遺集』の歌に「この夕ぐれ」が見え『新勅撰和歌集』『続後撰集』に「このくれ」が用いられていることを例歌をあげて記されている。そして『此の暮の時移りなば』といふ解釈も認められるやうではあるが、むしろ逢へないままで時節が過ぎてゆく歎

きと見る方があはれが深いのではなからうか」と解してられる。『私注』は「富士の柴山の茂みを利用できる間に會はう。時すぎて、落葉の時ともなれば會ふ所もなからうと相手を催し立てる心持である。」とこまかく言っている。口実としてならそれも良からう。しかし、東国人は木の下闇の時だけ、その下で男女相逢うたのであろうか。『注釈』のコノクレの用例は萬葉ではすべて「木の暗」であるという指摘は鋭いが、「この頃」という語の用例もあり、「暮(クレ)」の用例もあるので、「この暮」も無理ではあるまいと思う。東ことばには都のことばと異なるものもあるので、私は、「この暮」を認めたと思う。

『東歌疏』では「柴山の木下闇(コノクレ)ではないが、この夕昏れの時が移り去ったら、二度と逢はずにゐねばならなからうよ」と解しているが、「二度と」は言いすぎで、「夕昏れの時が過ぎれば今宵は逢えないことだろう。残念だなあ。」ぐらいに解したい。

万葉集ではないが古今集によみ人しらずの歌につぎのような歌がある。

春日野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり(春上)

この歌は伊勢物語第12段に初句を「むさしのは」と改めて出ている。木の晩の時期でなくても早春の野焼の時期でも山野で男女相逢うているのである。なお、考えてみるに、木の下闇の時期が過ぎたら逢えなくなるというのは、初夏の若葉のころに、秋の落葉期のころになったら逢えないと、ずい分将来を思いやっているで、間のびしているように思う(萬葉に見える「木の暗」の時期は「桜花木の晩茂み」という風に桜花と結ぶもの3例、ほととぎすと結ぶもの2例、闇と結んで「木のくれ闇卯月し立てば」というものもある。木の闇は晩春、初夏の印象が深いようである。しかし『私注』の前記したように「落葉の時」までをさすのが理であろう。とすると1年のうちの半ばぐらいである。「時移りなば」の時を期間と解せねばならず、短歌としての間のびした歌になるように私は思う。) そういう点からこの「コノクレ」は「木の暗」を「この暮」にかけたと見るか、直ちに「富士の柴山この暮の」と解してはいかがかと思う。

また、この柴山を富士山の山裾と考えるとそこは実は野でもあるのである。

山部赤人は、詞書では「春日野に登りて」(372)とし、歌では「春日の山」と詠じている。野は萬葉集では狩をする場であり、丘陵地帯と考えられるのである。人麿の「東の野にかぎろひの」(48)の野は写真によれば、丘陵である。今日、野のつく地名で農村の水田地帯となっているところもあるが、そういうのは江戸時代の新田として開発されたものと私は考えている。

そして思いおこすのは10年以上も以前のことと思うが、富士の裾野が米軍か自衛隊かの演習地になるのに反対して地元農民がその砲弾の打たれる日、反対行動を行なったのをテレビで見た記憶がある。禾本科の背丈以上の植物を背負うて、その植物、かやであろうか、あちこちに一群ずつ生えている。その場所から、かやを背負うて走り出て、それが何人もであるが、また、別のかやの丈高い一群に隠れるのである。その時、私はこれが富士のシバ山でなかろうかと考えた。前記したごとく赤人の歌では春日野は春日山でもあったのである。富士の裾野のシバの生えている場所は富士のシバ山であったとも言える。難波人は葦を燃料としていた。「難波人葦火たく屋の煤してあれど」2651) かやは燃料ともなり、屋根を葺くのに役立つ。あるいはアイヌ住宅のように壁にも使ったかも知れない。「新室の壁草刈りに坐したまはね」2315) そういうことを考えると、この歌の、富士の之婆夜麻の之婆は禾本科植物のシバかも知れない。そうすると「富士のしば山この暗(くれ)の」と「木の暗」を用いないのである。これも一案として成立するように思う。

(2)

3404 可美都気努 安蘇能麻素武良 可伎武太伎 奴礼杼安加奴乎 安杼加
安我世武

上毛野(かみつけの) 安蘇(あそ)の真麻群(まそむら) かき抱(むだ)
き寝(ぬ)れど飽かぬを何(あ)どか吾(あ)がせむ

この歌の第3句までの農作業が非常におもしろく歌われている。『注釈』では、この歌の個所に「安蘇のまそ群」と題する写真がのせられている。その写真では麻が一ぱい生えているこちら側に、その麻の半ばよりやや大きい(中には麻の半分ほどの女性三人が見える)農業者が四人見え、その手前に根つきで

引きぬいたらしい麻が横倒しに積まれている。そして、その訓釈の中で、『上野歌解』^{注(1)}の「可伎武太伎」を紹介している。今、その部分を記すと、「千本^{注(2)}云、麻は初メ刈（カル）物に非ず、引掘（ヒキヌキ）て後根を払也、其根（ネコジ）にこぐ時透間なく群（ムレ）生（ヒ）たる麻を左右の手して大抱（カカヘ）に抱へて懐（イダキ）ながら後ロへ寝（ヌ）るやうにして掘（コグ）其（ソノ）手業（テジナ）にいたく巧拙あり、といへり。是にて譬の意明らかにしてかつ面白し。」とある。続けて「但シ四ノ巻、庭立（ニハニタツ）麻手刈干（アサテカリホシ）、などあるは、引掘（ヒキヌキ）て後干（ホス）時かかるか、又初めより苧（カリ）たるかは知らねど千本主は其里人なれば疑なし。かかる業（ワザ）は処によりてかはる物なれば初めより刈ル所もありしにこそ」と、他の例についても記しているが、『注釈』の写真によれば、今日なお、安蘇では引きぬいてのち、根を刈り取るのであろうと察せられる。

さて、『注釈』は麻を根こじに引きぬいて横たえている写真を載せながら、その作業の力のいれ方、その力をもって愛する女性を抱きしめる農民にさほど関心を示さず、つぎのようなことをその「考」と題する個所に記しているのに私は不満を感じる。

「高麗錦紐解きさけて寝るがへに何（ア）どせろとかもあやにかなしき
(3465)

も似た作であるが、この方が素朴端的で、民謡としての東歌の面目を遺憾なく発揮したものである。」

「安蘇の真麻群」の一首は上3句に具体性があり、力がこもっているのを、序として一首の上に重みがあり過ぎ、下2句を圧倒している。それに対して「高麗錦」の方は一首のまとまりが良いと考えられたのであろう。しかし、私はこの上3句に麻を引きぬく農作業、農民の仕事が出ていて、それが下句へ流れ込むところに非常に興味を持ち、心引かれるものである。「高麗錦」の方は下2句が良いが、上3句は平凡である。

そして、私は東歌の序詞は下句を引き出すためだけのものでなく、そこに東国人の労働、生活が写されている点に注目せねばならぬと思う。『東歌疏』では、「序歌が実生活を比喩化した点も、第3句の圧力感も、この歌のえろちっ

くな味を素朴なものにしている。つまり肯定せずにみられない力を持ってゐる訣だ。」と本歌を鑑賞し『全註釈』も「非常に肉感的な歌である。女に対して身も代もない切迫した心が歌はれてゐる。珍らしい作である。」とこの歌を認めている。『私注』はこの作には冷淡で、「麻ならずとも、豆でも稲でも引き又は刈るには抱くやうにし云云」と言っているのは、麻の丈の高さや重さについての理解の足りなさを語っている。そして「この歌は、序の方が後から工夫されたものと思はれる程、主文の方が強く出てゐる。」と評されているが、結局、麻を引きぬく作業に対する理解のなさを語っているものである。

実は、私は昭和16年ごろ吉沢義則先生が崇徳院についてラジオ放送されるために香川へ見えられた。藤井公明氏と二人で先生を国分寺、鼓岡、綾氏邸そして白峯御陵等をご案内したが、国分寺あたりに麻を植えているのをご覧になって、その時は麻は人の背丈ぐらいの高さであったと思うが、「桜麻(サクラマ)の」が麻の枕詞となっているが、なるほど、一番伸びているところは桜の葉に似ているねと言われたことを覚えている。またこの時、麻を見たことが、私のこの歌に対する関心の始まりで、引きぬくことは当時知らなかったが、あの麻を刈りとって抱くには大変な力があるだろうと思ったものである。

(3)

3414 伊香保呂能 夜左可能為提尔 多都努自能 安良波路萬代母 佐祢乎
佐祢呂婆

伊香保ろの八尺(やさか)の堰堤(ゐで)にたつ虹(のじ)のあらは
ろまでもさ寝をさ寝てば

夜左可は八尺であろうか。「八尺勾瓠(ヤサカノマガタマ)」(『古事記』「八坂瓠之曲玉(ヤサカノマガタマ)」(『日本書紀』)によれば、尺をサカと読むべきように思われる。萬葉集にも「八尺之嗟(ヤサカノナゲキ)」(3276)とある。「長い嘆息」の意である。長さの単位としては東(ツカ)尋(ヒロ)などがやまとことばで、日常的であると思うが、正倉院に一尺の物さしがいくつもあるので、尺も長さの単位として用いられたのかもしれないが、語としては、一、二、三などが尺につかず、つねに八尺であるのはどういうわ

けであろうか。長いことを八尺と言ったのでであろうか。堰堤は今日でも農村の田の溝で用水をせきとめるところで、平地では別に高いものでなく、すこしの段をなす程度である。ここは八尺の堰堤で、堤の長さという説もあるが（『管見』^{註4}）高い堤であることを言うのでであろう。『上野歌解』に「夜左可能為堤はるとめて、田地へ引わたす水を溜（タ）めおく所なり。夜左可は八尺にてその為堤の深きを云か。又八坂にて坂など多きほりにある塘（キテ）を云にも有ルべし。今、水沢てふ辺りに八坂の塘（キテ）の跡あり。又、井出野、井出野入、てふ名も残れば其処（ソコ）なるべし。」と記し、続けて「天保年中上野田村、森田重信てふ人、公儀（オホヤケ）へ申て此ノ井出野より、上野田まで千七百間余の井堰を掘て田地（タドコロ）に引しより、其辺り旱魃（ヒデリ）の愁となし云云」とある。八尺の堰堤をさらに広げてかなりの新田を作ったのであろう。この地とすれば、この萬葉の八尺の堰堤はかなりの水量を蓄え得たのであろう。もっともこの『上野歌解』では八坂説をも出しているが、『東歌疏』はそれを受けたのか、あでの地形が「自然に岩床の出た場所に出来てゐることも多い。」と言っている。しかし、私は『略解』の「其国人の言へるは、いかほの沼は、此嶺の半上に在りて、沼の三方には山ども立ち、一方は開けて野也。其開けし方の落る所をみてと云とぞ。しからばやさかはその水の落る所の名、堰堤はさきにも言へる如く、キドメにて塘なるべし。」とあるのに従って、この八尺の堰堤は山の谷間をふさいで、ダムを作ったものと考え。八尺は高いことを言うので、七、八の八尺ではあるまい。谷川の水をせきとめた堰堤からあふれ出る水のしぶきに虹が立つ。それほどの高さであろう。常に水が溢れ出るようでは、その堰堤は破カイされるであろうから、時あって、そういうことがあるのではあるまいか。

『全註釈』『注釈』ともに萬葉集中虹を詠んだ作はこれ一つであると記しているが、その虹が雨後の大空にあらわれるのでなく、「八尺の堰堤にたつ」というところが面白い。言うなれば、新営の農業土木工事が完成して、水も十分たまった。さらに溢れ落ちる水しぶきに美しい虹が立つ。これで水不足も解消し、さらに水田を広げることもできよう。そう思いつつ堰堤から溢れおちる水しぶきにたつ虹を見ている農民の喜びの顔が浮んでくるようである。『私注』

の「伊香保山麓地方に開拓が進み、高い用水路などの建設されてゆく社会的関心も、動機の一つであったらう。」という説明もこの歌の序詞の基本であろう。この虹の美しさと、4、5句の大胆な揚言は、そういう農村青年の自信がうかがわれるようである。

なお、この谷に作ったであろう用水池について思い合わされる話があるので簡単に記しておく。『常陸風土記』の行方郡の、継体天皇の御代の箭括氏麻多智の開墾譚である。麻多智は郡家の西の葦原——湿地帯であろう——を開墾した。時に夜刀（ヤト）の神（蛇で、頭に角があると注している。湿地帯に住んでいたのであろう）を追い払って、山口に至り「標（しるし）の税（つゑ）を界の堀に立て」それより上は神の棲む所とし、下は人の田としようと言ひ、社を作って夜刀神を祭り、耕田十町余を開墾した。その後孝徳天皇の御代壬生連磨、その谷に池の堤を築かせたとある。さきの「山口」というのは谷であって、その谷に堤を作って用水池を作ったのであろう。継体・孝徳と時代がかなり離れているが、実は一続きの話で、谷より流れ出る水による湿地、葦原を切り開いて、その谷川が平地に入るところに池を作った。そして、水を自由に支配するようになって、農作業もうまくゆくようになったことと、夜刀神とをからませたものである。八尺の堰堤も平地の湿地を防ぐために作ったのかもしれないと、この常陸風土記の話から考えられるので書き記しておく。

(4)

3352 信濃奈流 須我能安良爾 保等等芸須 奈久許恵伎氣波 登伎須疑爾
家里

信濃なる須賀の荒野に雀公鳥（ほととぎす）鳴く声聞けば時過ぎにけり

この歌について『注釈』は大久保正氏の「東歌のほととぎす——東歌研究の一側面——」（『萬葉の伝統』所収）を引用され、その書中の「ほととぎすは萬葉集中最も多く読まれている鳥であり（中略）萬葉集第2期の初頭から4期にかけて多くの歌人によって読まれてゐるにもかかはらず、直接農耕や農耕の時節との関聯において詠まれたと見るべき歌が他に殆ど一首も無く、殊に東

歌や防人歌には今問題としてゐる一首を除き、全然見出されないといふ事実は、すくなくとも萬葉集の実例について見る限り、今の歌のぼあいだけ、これを農耕の時節にかけて解しようとするのは、実証的根據を持たない説であるということになるかと思ふ。」と述べられ「天平末ごろになれば、月にはほととぎす、ほととぎすにたちばな、あやめ、あるいは卯の花、藤浪といふやうに趣向がきまって、古今集以下のおびただしいほととぎす歌の類型が完全に確立したと言ってよい。」と言われ「ほととぎす雅風の伝統とは全くちがった生活的なほととぎすの歌の景としての成立を考へることは十分可能なわけであるが、萬葉集の事実についてみる限り、農耕生活との関聯からほととぎすが捉へられたやうな作品を他に一首も認めることができないこと」をあげられ、「東歌の中にただ一首しか姿をあらはしていない、見方によってはまことに貴重とも思はれるほととぎすを、遺憾ながら本来の東歌の世界から追ひ出すことをもって妥当とせざるを得ないのである。」と述べていられる。（私はこの大久保氏の書を直接見る機会が今日ないので『注釈』より引用した。そして『注釈』はこの結論を妥当なものとされている。）

私はこの大久保氏の見解に二つの面から異をとなえたいと思う。一つは東歌の性格からであり、もう一つは、ほととぎすと農耕との関聯は一首も無いかと言う点からである。

東歌には東国人の生活が出ている。その点に興味深いということを上記三首で述べてきた。それは大久保氏も「生活的なほととぎすの歌の景として捉へることは十分可能なわけであるが」と一部認められるところである。そうすると一首でも、農耕と関係ある歌があれば良いのであろうか。

東歌にもいろいろとあって、東ことばが用いられていない歌もある。しかし、それらを引くくめて東歌がある。ほととぎす優美の伝統と言われているが、東歌には優美をテーマとしていない歌が極めて多い。むしろそれと反対の生活、農耕生活民としての自然観を詠んだ歌が多いのである。ほととぎすを優美と結びつけないと言って、東歌から「追ひ出す」というのはいかがであらうか。

氏が「萬葉集について見るかぎり」と言っているのには『枕草子』に賀

茂に参る道で清少納言が田植えを見たことを記し、その田植歌を記している。「ほととぎす、おれ、かやつよ。おれ鳴きてこそ、我は田植うれ。」(226段)^{註(4)}を頭において書かれたのでないかと思う。農民の歌は貴族の歌と違っていることを本稿(1)(2)(3)で記してきたつもりである。ほととぎすにしても農民が詠めば、貴族と異なる趣が出るはずで、ほととぎす風雅の精神は貴族の間ではぐくまれたものである。桜の花の風に散るのを見て泣く田舎から比叡に出て来た稚児が、この風で「わが父(てて)の作りたる麦の花散りて、実の入らざらん思ふがわびしき」と言ってさくりあげてよよと泣いたのを「うたてしやな」とその著者が言っていることが『宇治拾遺物語』^{註(5)}に見える。これも農村育ちと都人との自然の見方の違いである。こういう風雅でない精神を農業人は持っていたのである。新古今集秋下に西行法師のつぎのような歌が見える。

小山田の庵近く鳴く鹿の音におどろかされておどろかすかな

新古今集の一般では、鹿の音はあはれをもよおすのであるが、この1首は山田を守る農民となって、田を荒らす鹿を追い払おうとしている趣で、西行ならではこういう異色ある歌は作れまい。ほととぎすのみでなく風雅の精神は貴族の間にはぐくまれたのである。ほととぎすをかりに風雅でなく詠じたとしても農民の作ならば当然のことである。

もう一つ、ほととぎすと農との関連する歌は萬葉集に他に1首もないのであろうか。これは訓の問題もあるが、私は1首あると思う。つぎの1首である。

10. 1942 ほととぎす鳴く声聞くや卯の花の咲き散る丘に田草(たぐさ)引く妹(旧訓)

この第5句は「田草引(憾嬌)」と原文にあるが、『略解』は「源康定主(ヌシ)の説、草は葛の誤なりと有るぞよき。集中クズを田葛と書けり。さて葛引く女を呼びかけて問ふさまなり。」と誤字説を出し、その丘で葛を引いている女に問うているとしたのである。「憾嬌」をヲトメと読もうとする心もあったのであろう。この個所は『全註釈』が「くさひくをとめ」と読み「原文のままであり。田の草だから田草と書いたのだ。」と言っている。他に森本治吉『符号本萬葉集』は本文のみの本であるが「田草(くさ)引く憾嬌」であり、岩波文庫『新訓萬葉集』も同様である。しかし、目下、手もとにある『古義』『新考』

『口訳』『全釈』『注釈』『小学館版萬葉集』『岩波版大系萬葉集』等はずべて田草でクズと読むか「田葛」と改めてクズと読むかしている。あるいはこの1首故に前記大久保氏は「殆んど」と言われたのであろうか。

「萬葉集」では「くず」の歌は18首、19例で、「葛」7例、「久受」5例、「田葛」7例である。(本歌は問題としているので除いている)。「葛」は、小村昭雲著『萬葉植物図鑑』の解説によれば、原野に自生する丈夫な多年生蔓草で、年数を経た古茎は直径4センチにも達し、20メートル位までも延長し、木本とまがうものもある。根からクズ粉が得られ、また上代クズの蔓をひいて織物にも利用したことが歌によって知られるとある。(大意ヲトル)『萬葉集大成』第8巻「萬葉集の植物二」(松田修)では、「葛に田の字を冠せる用字明らかでないが、昔は山田、荒田等に多く葛が生へてゐたからであらう。」とされているが萬葉集にはそういうことを詠んだ歌は1首もない。葛を田葛と書くことについては『萬葉集講義』卷三^{註4)}にくわしく、『攷証』^{註5)}が「神代紀下に粟田(アハフ)豆田(マメフ)など生の意に田の字を書くを思へば「葛の生たる意にて田の字を添て書るか」という説を紹介し、また「按ずるに本邦にて栽培したるを聞かねど、支那にては栽培せしなり。」と言い、本草綱目に、時珍の語として葛に野生、家種の二種あるを記し、晋の張華の博物志に葛に野葛、家葛の二種あることを記し、山葛の語が応援杜甫などの詩に散見する。この山葛は即ち野葛で、「田麦」「田桑」の熟字の例によれば家葛を田葛ということができよう。ただし、田葛の実例は未だ見えないが、支那での熟字を本邦にて襲用したものであろうといっているのが正しかろう。他に適切な解を見得ないので省略する。

さて、つぎに葛を詠んだ作のすべて18首19例を、『注釈』によって記す。

- 3.423 ……九月(ながつき)のしぐれの時は 黄葉(もみちば)を折りかざさむと 延ふ葛のいや遠永く [一云 田葛(くず)の根のいや遠長に 葛代に絶えじと思ひて……] (山前王)
- 4.649 夏葛の絶えぬ使のよどめれば事しもあるごと思ひつるかも (大伴坂上郎女)
- 6.948 真葛はふ春日の山はうち靡く春さりゆくと 山の上に霞たなびき

高圓に鶯鳴きぬ……（諸王諸臣子等 作者未詳）

- 7.1272 劍（たち）の後（しり）鞆に入野に葛引く吾妹真袖もち著せてむと
かも夏草刈るも（柿本人麻呂歌集）
- 7.1346 をみなへし佐紀澤の辺のま田葛（くず）原何時かも繰りて我が衣に
着む（作者未詳）
- 10.1985 真田葛（まくず）はふ夏野の繁くかく恋ひばまこと吾が命常ならめ
やも（全上）
- 10.2096 ま葛原なびく秋風吹く毎に阿太の大野の萩の花散る（全上）
- 10.2208 雁（かりがね）の寒く鳴きしゆ水茎の岡の葛葉は色づきにけり（全
上）
- 10.2295 我がやどの田葛（くず）葉日にけに色づきぬ来まさぬ君は何心ぞも
（全上）
- 11.2835 ま葛はふ小野の浅茅を心ゆも人引かめやも吾なけなくに（「譬喩」
のうち作者未詳）
- 12.3068 水茎の岡の田葛（くず）葉を吹きかへし面知る子らが見えぬ頃かも
（作者未詳）
- 12.3069 赤駒のい行き憚るま田葛（くず）原何の伝言（つてごと）直（ただ）
にしえけむ（作者未詳）
- 12.3072 大崎の有磯の渡（わたり）延ふ葛の行方も無くや恋ひ渡りなむ（全
上）
- 14.3364 足柄の箱根の山に粟蒔きて実とはなれるを逢はなくもあやし 或本
ノ歌未句ニ曰ク はふくずの引かば寄り来ね下なほなほに
- 14.3412 上つ毛野久路保（くろほ）の嶺ろの葛葉がたかなしけ子らにいや離
り来も（全上）
- 16.3834 梨棗黍に粟つぎはふ田葛（くず）の後も逢はむと葵花咲く（全上）
- 20.4508 高圓の野辺はふ葛の末遂に千代に忘れむ我が大君かも（中臣清麻呂）
- 20.4509 はふ葛の絶えず偲はむ大君の見（め）しし野辺には標（しめ）結ふ
べしも（大伴家持）

以上の如く「葛」は「遠永く」「絶えじ」「絶えぬ」「はふ」「引く」「繰

りて」「なびく」「色づく」「吹きかへし」「赤駒のいゆきはばかり(繁茂しているさま)」「嶺ろの」などの語にかかり、あるいはかけられている。農業とかかわったものは1首もない。しかし、「ほととぎす」とも1首もかわりをもっていない。それ故、「田草」を「田葛」と改めるのに私は反対である。また、誤字説で1首というのは、はかないことである。以上により私は、巻10の1942の前記した歌は

ほととぎす鳴く声聞くや卯の花の咲き散る丘に田草引く憾嬌

タグサヒクヲトメ、母音を含まぬ字余りは不可とならばクサヒクヲトメと読みたい。「草引く」という例はなく「葛引く」の例はあるという「岩波大系『注釈』」の説があるが、そこで、私は一案として「田草」は稗をさすのであるまいかと考えた。稗なら引かねばなるまい。萬葉中に2首見える。

11. 2476 打つ田にも稗はあまたもありといへど擇らえし我ぞ夜を一人寝る
(柿本人麻呂歌集)

12. 2999 水を多み上(あげ)に種蒔き稗を多みえらえし業(なり、或ハわざ)ぞ吾がひとり寝る

いずれも稗は水田中より、より出されて引きぬかれるもので、万葉時代すでに稗は一般的に食用にならないものとなっていたのである。(実は現在でも、香川県綾歌郡地方の農業者の用語で、水田中の稗を抜くことを「田の草拾う」と言っている。)今日でも田の雑草中最も大きなものは稗である。そこで、引く田草はヒエではあるまいかと思う次第である。田草引憾嬌を「稗引くをとめ」と読んではいかかかと思う。それはともあれ、以上により、ほととぎすと農作業との関係は1首ながら出てきたと思う。

以上、東歌は農民的社会の歌であるということと、ほととぎすと農作業との関聯する歌が1首出てきたことという二点から、標記の「信濃なる須賀の荒野の歌」を「東歌から追ひ出す」ことを許していただきたいと大久保氏に願うものである。

さて、この歌は第5句が表現不十分である。何の時が過ぎたのかを言っていないからである。しかし、考えてみれば、作者としてはそれは自明のことであったのであろう。その自明のことが読者にはいろいろと取られている。まず、

この歌がどう解されているかをまとめてみようと思う。

(1) 農の歌

『管見』 「ほととぎすは、農をすすめて、過時不熟トなくト、ふるくよりいへり。」(『拾穂抄』同)

『代匠記初』 「時過にけりは時は来にけりの心なり。第六にをとめらがうみをかくてふかせの山時のゆければ都となりぬ」(桂補例歌は萬葉集卷六, 1056, 田辺福麻呂歌集の歌, この時のゆければを, 時の来ればと解したのである。)

『代匠記精』 「落句(桂補 時過ぎにけりをさす)ハ時ノ至ルト云意ナリ。第六ニ時ノユケレバ都ト成又トヨメルヲ思フヘシ。霍公鳥ハ農ヲ催ホス鳥ナレハ、サル心ナトニテモカクハヨメル歟。」

(2) 京人の任にて下りし人の歌

『考』^{注①} 「旅に在てとく 帰らんことを思ふに、ほととぎすの鳴まで猶在をうれへたるすがたも意も京人の任などにてよめりけん。又相聞の方にも取ば取てん。」

『略解』 考に同じ

(3) 相聞の意の歌

『考』『略解』 (2)に対し、一案として記す

『古義』^{注②} 「歌ノ意は、春の末かぎりに逢むと、人に約り置しを、得逢ずして、夏来て、霍公鳥の音に驚きて、彼が鳴を聞ば、契りし時はや過にけり、と云るなり。」

(4) 夫の帰る時過ぎし意

『新考』^{注③} 「夫の帰り来べき時なるべし」

新しい書では『東歌疏』は「時は期待した時であるが、自分だけに限らず、人にも期待させた時と考へられる。」と言い、上記(2)だけでないかも知れぬと言い、いま一つの見方として(1)をあげている。『評釈』は(1)である。『全註釈』は(2)とも解せられるが「時の移ったことを嗟嘆したものと見るべきである」とされている。これではマチガイはないがハッキリしない。『私注』は(3)と取るのが最も自然であろうとし、『注釈』は前記大久保説を妥当とされているので

(1)では無い。(2)であろうか。

さて、私見を述べると、(4)は帰る時ということを考えると、夫が帰る時と、京人たる自分が帰る時との違いのみであるので(2)と表裏である。ただし須賀の荒野では人家も無いように思われるので、その点で従いがたい。(2)の京人の任に下っての作とすると、天平以後、次第に、ほととぎす風雅の作が行なわれているのに、そうでない。京人の作ならば、ほととぎすの声を聞いて感激すべきであろう。その点、京人の作とも思えず、たとえ京人であっても風雅ならざる、東人とあまり変らぬ京人と言えよう。(3)の相聞説は本稿の「時移りなば」を思わせる点があるが、第5句が唐突で、その意がよく表現されていない。そこで私は(1)の農に関する歌ととるのである。枕草子所載のようなほととぎすについての民謡があったことは、農業者として当然考えられることである。作者が須賀の荒野での作ということの理由を説明できないけれど、役が何かで、国府か郡家で仕事を命ぜられていたのであろうと推測するのみであるが、この説が、最も自然なように思う。

終 り に

実は私に「日本文学と自然」と題するエッセイ風の文章がある。京都から出ている短歌誌「ハハキギ」に毎月1頁で8回ほど書いたところで、アラブの石油値上げで、雑誌も頁数縮少、ために中絶した。他に高松の俳誌「屋島」にも4回ほど書いている。停年の時に、香大の国語研究室から出ている「国語漢文研究」の第13号(昭50.3)を藤井公明氏と私との退官記念号として下さったので、その時、そのエッセイをまとめて載せていただいた。

テーマは、太古、自然は神いますところであり、また、人々の生産の場であった。それが美の対象となり、季節と自然とが結びついて季節美となり、さらに春のあけぼの、秋の夕暮などと時と結びつく美となる。その経過を見ようという長い試みであった。額田王の春秋の美を判定する歌では、春秋の美はいずれも山の鳥や花や黄葉の美を語っている。蘇我の馬子は紀によれば額田王より時代は早い庭園を作り、池を掘り、島を作っている、よって島大臣と言われた。その庭園はのち天皇家の所有となり、紀によれば島の宮とよばれ、天武帝が壬甲

の乱の前後に二度ほどとまっていられ、萬葉集によればその後、草壁皇子の宮殿となり、その薨去後の舎人らの歌でその大体を知り得る。ということが雑誌に掲載され発行されたその日、その島宮の発掘の報告が新聞に報ぜられたのは非常に印象的であったが、その号をもって中絶したのはこれまたまことに印象が深い。その後、何年経過したか、思いついて書きはじめたのが本稿である。

なお、もうひとつ、私に「大伴家持私論1」（「香川大学学芸学部研究報告第1部第9号、昭32.7月」と題する一文がある。そこでは「四季歌——ほととぎすを中心に——」「豫作歌」の二章を収めているが、この前者は、私の「日本文学と自然」の1部をなすものと考えられる。考えれば、長い間の私のテーマのひとつであった。今後、折にふれて考えて行こうと思う。

注

- (1) 注釈 沢泻久孝著 萬葉集注釈
 - 全註釈 武田祐吉著 萬葉集全註釈（初版）
 - 口訳 折口信夫著 口訳萬葉集（折口信夫全集第5巻）
 - 東歌疏 折口信夫著 東歌疏（同第13巻）
 - *代匠記精 契冲著 精撰萬葉代匠記
 - 私注 土屋文明著 萬葉集私注
 - *略解 橋千蔭著 萬葉集略解
 - *代匠記 契冲著 初稿萬葉代匠記
 - 岩波版大系 高木市之助他著 日本古典文学大系萬葉集
 - *上野歌解 橋本直香著 上野歌解
 - *管見 下河辺長流著 萬葉集管見
 - *考 賀茂真淵著 萬葉考
 - *古義 鹿持雅澄著 萬葉集古義
 - 新考 井上通泰著 萬葉集新考
 - 評釈 窪田空穂著 萬葉集評釈
 - 小学館版全集 小島憲之他著 日本古典文学全集萬葉集
 - *印をつけたものは桜井満編『萬葉集東歌古注集成』による。
- (2) 佐々木信綱編『萬葉学論纂』所収。
- (3) 桜井満編『萬葉集東歌古注集成』によれば、橋本直香著『上野歌解』中に鈴木千本とある。『注釈』では鈴木千年とある。この方が名として正しいように思うが、一応『集成』に従っておいた。
- (4) 日本古典文学大系『枕草子・紫式部日記』による。
- (5) 朝日新聞社発行「日本古典全書」本による。